



Title	カリモフ死去後のウズベキスタン外交 : 近い他者と遠い他者
Author(s)	小泉, 昌之; KOIZUMI, Masayuki
Citation	日本中央アジア学会報, 13, 41-43
Issue Date	2017-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.13.41
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88319
Type	journal article
File Information	JB013_004koizumi.pdf



カリモフ死去後のウズベキスタン外交

— 近い他者と遠い他者 —

小泉 昌之

2016年9月2日、独立以来ウズベキスタンの大統領の地位にあったイスラム・カリモフが死去した。多くのウズベキスタン国外のメディアが同国の不安定化を危惧する中で、カリモフ政策の継承を掲げるシャフカト・ミルジヨエフ首相がカリモフの葬儀委員長に就任することで、その後継者として存在感を示した。9月8日大統領代行に就任、12月4日の選挙で正式に大統領に選出された。

カリモフ政権における外交政策については湯浅 [2004] およびダダバエフ [2013] によって、「特定の大国の影響下に入らない、全方位・均等を手段とする自主外交」「周辺の中央アジア諸国との信頼醸成の不足」といった傾向が指摘されており、ミルジヨエフがその外交方針を継承するか否かが大きな問題になると考えられる。一方でダダバエフは、「周辺国との信頼醸成の不足」という事実には、ウズベキスタンがイスラーム過激派対策の為、周辺国との一定程度の協力の必要性を意識していたとしている。さらに中央アジア諸国は「社会の安定による世俗主義（権威主義）の維持」「自国の大国からの独立」といった目的の為に動いているという点では共通しており、中央アジア社会に共有する「規範」が存在すると考えることも出来る。

その為、今回の発表ではミルジヨエフ新大統領を「カリモフ政策の継承者か、脱カリモフを志向する改革者か」という視点ではなく、ウズベキスタン独立時から存在する「規範の維持者」として捉え、「カリモフの継承者」「カリモフからの改革者」という2つの顔を「規範を守るための手段」として巧妙に使い分けていると仮定する。その上でこの仮定を、国際関係を動かす現実には「文化」「理念」「規範」が作用すると考える国際関係理論、コンストラクティヴィズムを利用して証明する。

なお、研究方法としては上述の「規範」を共有していると仮定できる周辺の中央アジア諸国を「近い他者」、ロシア、中国といった大国を「遠い他者」と位置づけ、それぞれに対するウズベキスタンの外交政策の比較を行う事で、上記の仮定を実証する。

まずミルジヨエフ政権下のウズベキスタンの「近い他者」に対する外交政策について記述

する。

水問題などをめぐって対立関係にあったタジキスタンのラフモン大統領は、カリモフが死去した直後にサマルカンドを訪問し、葬儀に参加した。その後2016年9月にウズベキスタン外相のカミロフがラフモンと会談、10月にはミルジヨエフとラフモンの電話会談で物流と通信、輸送、投資の強化と相互の利益のための対話の継続が確認された。一方でラフモンは10月にロゲン・ダムの工事を再開した。25年ぶりのタシケントドゥシャンベ間の直行便再開計画も、試験飛行の後にウズベキスタン側が飛行許可を停止させている。

一方でタジキスタンと同じように水問題を抱えているキルギスとミルジヨエフ政権下のウズベキスタンとの間には、2016年12月に首脳会談が実現し、経済交流について2年以内に貿易額を5億米ドルまでに拡大させる事などが目標とされた。一方で水問題などの解決についての言及は確認できなかった。

ミルジヨエフはカリモフの死去からわずか10日後にカザフスタンのナザルバエフ大統領と首脳会談を行い、さらにカザフスタンのマミン副首相との間で共同取引所の設置、国境組織の協力体制の構築、金融分野でのプロジェクトに対する相互協力、貿易額を現状の30億米ドルから50億米ドルにする目標の設定などの取り決めが行われた。一方でウズベキスタンの農作物がカザフスタン経由で直接ロシアなどに輸出できない問題についての言及は確認できなかった。

トルクメニスタンとの間でも首脳同士の電話会談が行われるなど関係強化の方針が明らかにされたが、ウズベク国内貨物便の列車がトルクメニスタン領内の線路を通過する際の関税問題については言及されなかった。

ミルジヨエフの中央アジア外交は信頼醸成というよりは、地域全体の安定によってミルジヨエフへの権力移譲を確実に行為の、「規範の確認」という意味合いが強いと言える。

続いてミルジヨエフ政権下のウズベキスタンの「遠い他者」との外交政策について述べる。

まずロシアのプーチン大統領は、中国との結びつきが強くなっている中央アジアにおける影響力を取り戻す為、カリモフ死去後数日でウズベキスタンを訪問した。この際まだ大統領代行にすらなっていない葬儀委員長のミルジヨエフとカメラの前で並んで歩くなどし、ミルジヨエフの次期大統領としての存在感を高めるのに利用された。ミルジヨエフは「ロシア離れを目指していたカリモフからの変革者」として振る舞い、ロシアとの軍事交流などの再開を行った。

一方中国は王毅外相をウズベキスタンに派遣し、ミルジヨエフと会談すると同時にカリモフの墓所で弔意を示し、ミルジヨエフに対してカリモフ政権時代に中国と結んだ協定の履行を確認した。ミルジヨエフは中国に対しては「カリモフの継承者」としての態度を鮮明にした。

このようにミルジヨエフは「カリモフの継承者」「カリモフからの改革者」という立場をあ

くまで手段として巧妙に使い分けつつ、本質的にはウズベキスタン独立時から権威主義体制を国民が「承認」する条件であった「社会の安定による世俗主義社会」と「自主外交」の守護者として振舞おうとしていると言える。

(筑波大学大学院人文社会科学研究科)